歌誌　黄雞「春号」投稿歌

山形　黒沼　貞志

歌題　アンソロジー　２０１６～２０２０　Ⅱ

いつのまに古希の足音近づきぬ今朝も日課の龍頭を巻きたり

リフレッシュ休暇を充てたかの年の極月（きわまりづき）に母は妣（ひ）となり

紫陽花の白と紫を背に配しひとり主役の深紅の薔薇あり

疲れ果て路肩に寝入る父と娘（こ）に強まる日差しのフレンドシップデー

朝明けて「ポッ」と花開くシャラの木の真白き色に夏の香おぼゆ

誕生日の花を買う日は寒の雨店のチラシで知る「１月３１日（あいさいのひ）」

テーブルの一輪の薔薇つつましき育てし妻の思いかほり来

ハイカーの疲れを癒す木道の優しき一輪ニッコウキスゲ

雪渓で連れだち遊ぶ夏スキー彼方に霞む連山清し

山路の休みどころに家族づれ連山遥かに語らい尽きぬ

雪渓を一役として霊峰が遊び場となり想い出となる

オバマ氏のヒロシマ訪問「好し」としてノーベル賞への花道とせむ

食や旅の癒しの心を弄び「いいね」を貪るインスタグラム

身近より社会の規範崩れゆく世界もさように思える今の世

自国主義進みて蔓延る憎悪の念世界の寛容消えて久しき